

ハロウィンに思う

中村 龍介

十月三十一日、今年のハロウィンは例年以上のにぎわいを見せた。川崎駅前では、仮装行列に二千人が参加した。渋谷の名所にもなったスクランブル交差点では、センター街まで、数万人の人出で大混雑したという。これらのお祭り騒ぎでの主人公は若者が中心だった。

そもそも、ハロウィンは古代ケルト人が始めた宗教的祭事。ケルト人にとって一年の終りは十月三十一日だった。この夜、死者の霊が家族を訪れ、同時に有害な魔女が現れると信じられていたので、それらの悪霊から身を守るために仮面を被り、魔除けの火を焚いた。

この習慣がアメリカに渡ったのは十九世紀以降のことだが、宗教的な意味合いが徐々に薄れていき、今では子どもの娯楽といった色彩が強い。日本には一九七〇年代にアメリカから伝わった。他の娯楽行事がそうであるように、日本では本来の祭事としての意味合いは忘れ去られ、娯乐的な側面のみが強調される。日本でのハロウィンといえば、今や仮装とカボチャのランタンがその象徴のように見える。

アメリカのハロウィン祭りでの付きものは、子どもたちが仮装して近所の家を回ることだ。玄関を開けると、彼らは一斉に叫ぶ。

「トリック・オア・トリート (Trick or Treat) -」

各家庭では用意したチョコレートや飴の入った袋を渡す。すると、彼らは大人しく帰っていく。何も貰えないとなると何時までも立ち去らずにこの台詞を合唱のように繰り返す。

この台詞の「トリート」とは「もてなす」という意味で、「プレゼントをもらおう」ことを指す。「トリック」は、企み、策略、誤魔化しといった日本語にもなっているが、私見では、この場合、最適な訳語は「たぶらかす」ではないかと思う。「何かいいものを呉れないと、たぶらかすぞ！」と、家人を脅迫しているのだ。

私たちの家族がアメリカに赴任した最初のハロウィンでは



何も用意していなくて困ったことを思いだす。幸い、日本人だからか、子どもたちにはたぶらかされずに済んだが…。

翌年からは、我が家の当時十四歳の娘もハロウインの夜は、黒いマントを着て、近所の子どもたちと合流し、キャンデーせびりの行脚に出かけるようになった。

私の感覚では、ハロウィンと「トリック・オア・トリート」とは、クリスマスとジングルベルの関係のように、切っても切れないのだが、幸か不幸か、日本では子どもたちのオヤツせびりが抜け落ちていく。

昨今、独居老人や高齢者世帯の増加が問題にされているが、彼らの悲劇的な一面は、近所付き合いや外との接触が極端に少ないことにある。米国流「トリック・オア・トリート」の習慣を導入すれば、年に一度ではあるが子どもたちと接する機会ができ、チョコレート業界などもバレンタインデー以外にも売上げを伸ばすことができ、喜ばれるのではないかと思うのだが…。

(了)

【二〇一四年十一月記、原稿用紙約三枚】

課題「たぶらかす」】